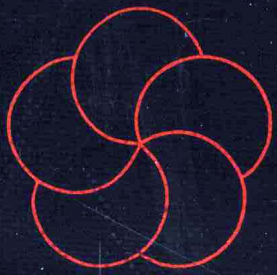
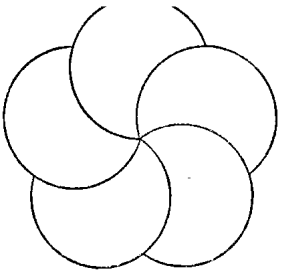
2

日本文学の歴史



万葉びとの世界



2 万葉びとの世界

日本文学の歴史

高木市之助　竹内理三編

切一取一線

付録引換券

日本文学の歴史（全12巻）　第2巻 万葉びとの世界

昭和42年6月20日　初版発行

定価650円

編者　高木市之助
　　竹内理三

発行者　角川源義

印刷所　中光印刷株式会社
製本所　株式会社 鈴木製本所
製版所　株式会社 高木写真製版所
発行所　株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見2—13
振替東京195208番
電話東京（265）7111番

© Printed in Japan　落丁・乱丁本はお取り替えいたします

目次

万葉の前夜

王仁来たる　楽浪王光の墓　王氏南遷　王氏百済に仕える　楽浪遺民の収奪　倭王武の上表文　仏教伝わる　聖徳太子の誕生　蘇我氏の横暴　聖徳太子摂政となる　仏法興隆　遣隋使　留学生　最初の述作　最初の思想家　新知識の移殖　九

万葉のあけぼの

晩夏の雨　ピラミッドの王者　兄妹の恋　帝王と少女　聖者と人間　山上の祝福　女帝の嘆き　磐代の自傷　湖畔の王朝へ　三六

唐ぶりの来訪

新文学近江に興る　敗戦の収穫　誰が家にか向はむ　模倣・盗作の文学　大宝の遣唐使　天平へ　五四

近江朝の才女たち

湖畔のみやび　人妻ゆえに　何か嘆かむ　質に出された女　御言持ち　秋山われは　哭く女たち　大宮人は行き別れなむ　万葉の母神　ささなみの音　七〇

歴史への回想　九二

天智の死　壬申の乱起こる　湯沐の邑の人　雷の声　乱の生き残り　血統の固執　帝室伝承の総合　古ごとの記録　岡本宮の帝紀・旧辞　壬申の栄爵　『日本書紀』の成熟　成長のとまった『古事記』　帝室の少年読物　『古事記』の功績　『日本書紀』の虚実　『日本書紀』の文芸

人麿登場　一三

血と記憶　民謡との交流　女官への恋　後宮の歌人　生ける神話　相聞的挽歌　舎人の精神　滅びしもの　高朗整斉の調べ　現身の哀歓　石見慕情　霧の中の死

個我の目ざめ　一四

移民のむれ　「ことば」の朝廷　「ことば」の詩　詩賦の興　恋の悲しみと風流　翳りなき感性　孤の動揺

花ひらく万葉　一六

白鳳の死　優雅な女帝　女のにおい　新しき宮廷　花の都　都会の底辺　都雅の誕生　平らけく我は遊ばむ　金村の俗　赤人の目　虫麿の幻想　虫麿の錯覚　憶良の倫理　憶良の孤独　憶良の呪いと栄光　神亀の三ラウンド　旅人と長屋王　死を急ぐ人々

風土と古老のロマン　三〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「風土記」誕生　播磨の国守と古老　宇合の常陸赴任　軽野橋の虫歯　宇合の帰京　宇合の九州下向　「新九州風土記」　出雲の兵要地誌　出雲と祭祀　自然とのたたかい　村落の日々　性の解放　炉辺のロマン　土の英雄たち　滅びゆく人々の伝承

万葉の流浪　二四〇

天ざかるひな　国司の館　異土のおどろき　古老のロマン　望郷の心　辺境の風流　美女の幻想　遠国への夢　民謡の上京　恋のひな歌　ひな歌の放浪　都のひな　万葉のデルタ

東国の土のかおり　二六八

二つの街道　遠い国　土の人々　自然の交響　生活のうた　アダムとイブ　民衆の輪　雑草の花　新しき糧

防人の嘆き　二九二

英雄と農民　運命ののろい　愛別離苦　難波へ　寄せ集めの兵士　大君の命　家持と防人

遊女の歌ごころ　三一〇

蜂のような女　泣いた天子　行幸の風流　行きずりの真実　和歌の流浪　貴公子の青春　あそびせんとや

みやびゆく万葉　三三八
大宮人の遊び　生ける験　風流意気の士　「ひな」のみやびを　「ますらを」から「みやびを」へ　天平の四季　天平の恋情　静かなる悲歌　無常観の深化　政争のかげに　白露の恋　女の哀愁　美化された恋　谷間のかけ橋

家持の憂愁　三五四
愛発の関　内舎人時代　従五位下拝命　あいつぐ栄職　太宰府時代　父旅人の死　大伴池主との出会い　病臥二旬の苦悶　女と越中秀歌　都の現実　生涯の絶唱　うたわぬ詩人家持　万葉の終わり　春愁の人家持　秋の死

天平の新体詩　三八〇
家持の帰京　見果てぬ夢　佐保の人々　宴の詩　宇合の新風　配流の月　卑官の遊び

霊異の世界　三九八
ある伝道者の死　鑑真盲いて大和へ　教団と民衆　民間仏教の論理　愚直な信仰　邪淫の夢　民間の伝道　私度僧の世界　説話の温床　証言の文学　まぎれ込んだもう一つの要素

万葉集のゆくえ　四三
白鳳の典礼　中継ぎの天子　十六巻本『万葉集』　古代美学の創造　歌の百科全書　新たなる夢　十六巻本の落とし子　流浪十年　宝亀到来　宝亀の歌学　若き日の記念塔　家

持万葉　眠る歌集　平城万葉

万葉びとの世界　四四六

文学における英雄時代　倭建の命の英雄像　英雄像のロマンとリアル　よみがえる英雄　有間皇子の遵明　人麿の原型　家持の氏族意識　次代への課題

参考文献　四六三

日本文学年表（付　生没年表）　四六四

あとがき　四七二

特集・万葉の風土

風土へのいざない　142
大和の国　162
近畿の旅　206
山陰と内海　236
天ざかるひな　264
み越路　288
東の国々　306

写真特集

飛鳥の石　32
ねむる古代　52
仏の旅　66
伎楽の面　68
二上山の落日　118
飛鳥・藤原の宮跡　120
大宮人の生活　324
庶民の生活　326
彷徨五年　350

らくがき　352
天平のいらか　378
シルク・ロードの果て　394
正倉院の楽器　396
遣唐使と留学僧　418
天女の楽　420
万葉の植物　1　442
万葉の植物　2　444

装幀　大森　忠行

執筆者（五十音順）

青木生子　伊藤博　犬養孝　大久保正　神田秀夫
久米常民　小島憲之　高木市之助　竹内理三　土橋寛
中西進　益田勝実　八木毅

本巻協力者

浅野喜市　阿倍寛子　伊藤銀造　入江泰吉　川口朗　近藤信義　坂本万七
高野正美　高橋三知雄　田中琢　田辺昭三　坪井清足　蜂矢宣郎　堀内民一
丸山順介　宮次男　山下信行　横山浩一　渡辺和雄

京都国立博物館　京都大学文学部　国会図書館　正倉院　世界文化社　東京国立博物館　東京国立文化財美術研究所　奈良国立文化財研究所　文化財保護委員会　平凡社

万葉びとの世界

法隆寺と斑鳩の里

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

万葉の前夜

王仁来たる

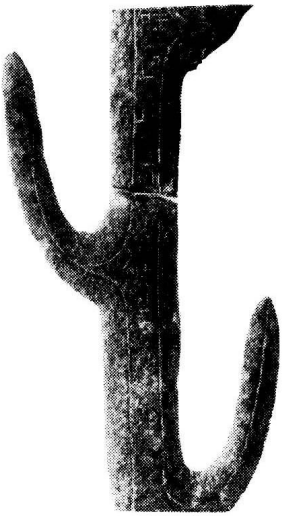
応神天皇の世のこと、百済国の照古王が、牡牝一匹ずつの馬を阿知吉師につけて奉り、また大刀と大鏡とを奉ってきた。また朝廷は、もし百済の国に賢人があれば貢上せよと命じたところ、貢上されたのが、和邇吉師で、『論語』十巻、『千字文』一巻、あわせて十一巻をこの人につけて貢進してきた。

これは、『古事記』に伝える物語である。『日本書紀』でも、ほぼ同じ筋の話を応神十五年のこととして伝え、ここでは、学者の名を王仁と表記している。

この話は、漢籍と漢字がわが国に伝わってきたことを伝えるものとして有名であるが、この話は、日本の学問のおこりを示す起源説話にすぎない、という見方が今日では常識となっている。しかし、必ずしもそうとは思われないふしもある。

まず、和邇吉師を貢上した百済国の照古王のことである。この王は、「書紀」では「肖古王」と書き、百済ではたしかな王として最初の人であるとされている。また大刀と鏡とを献上したことは、『日本書紀』で、神功皇后五十三年九月のこととして、百済の使者が七枝の刀一口と七子の鏡一面および種々の重宝を献上したとしるす事がらと同じと思われる。この七枝の刀は今日、奈良県天理市の石上神宮の神庫に伝わる七支刀にあたると最近の学者は考えるようになった。この七枝の刀は鉄刀で、刀の左右に交互に三本ずつの枝刃が出ていて、刀身と合わせるとまさに七枝となる。本幹の

天寿国繍帳　部分



七枝の刀　いま宝物として石上神宮に伝わる七支刀は，長さ約75センチの鉄剣である。剣身の両面に金象眼した銘文によれば，百済王が倭王の要請で特に作ったものであることがわかる。石上神宮は，もと大和朝廷の武器庫であったという由緒からも，七支刀はこの神社の神宝として伝えられるにふさわしい。

刃の表裏に金をはめこんだ銘文があって、「泰和四年四月十一日に練りきたえた鉄で七枝の刀をつくった。これはどんな武器にも勝るめでたい刀で、王侯が佩びるべき、りっぱな刀である。これまでこういう刀はなかったが、百済王とその太子とが、恩をうけている倭王の要請によってつくった。この次第を後世に伝える」という意味がよみとられる。泰和四年というのは、百済が正朔（年号）を奉じている東晋の年号のことで、その四年は三六九年にあたる。神功皇后が、実在の人物かどうかは問題があるが、応神天皇は、たしかに実在した天皇であって、その年代はほぼこの四世紀にあたる。『日本書紀』では、誰しも知っているように、古い天皇の時代は実際よりも百年以上もさかのぼらせているので、この石上神宮に伝わる七支刀こそ、「書紀」にいう七支刀にちがいない。

つぎに『古事記』では大鏡といい、「書紀」では七子の鏡という鏡のことである。七子の鏡は、古墳から出土する鈴のついた鈴鏡のことか、あるいは、鈴のかわりに小鏡をまわりにつけた大形の鏡とみればよいだろう。

最後に和邇吉師または王仁と称する人物がはたして実在したものかどうか。この人物の名は、「書紀」に王仁とあるのが正しく、『古事記』では、王仁を「ワニ」と訓んで和邇の二字をあてたものだろう。吉師というのは、氏姓制度がおこなわれていた古代のカバネの一

つであって、名ではない。ところで、王仁は本来は音でオウジンとよむべきである。それは、奈良・平安時代に、王仁のことを王辰爾とよんでいることでもわかる。王仁の王は姓、仁が名である。

では、この王仁は、はたして仮空の人物であろうか。

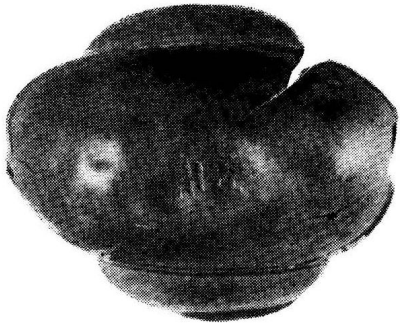
楽浪王光の墓

昭和七年十月二十日、朝鮮大同江流域にのこる、一つの古墳に葬られた死者の腰のあたりから、鉄剣と指輪とともに、一枚の木印が発見された。印の一面には「楽浪太守掾王光之印」の九字、他の一面に「臣光」の二字が刻まれていた。これによってこの古墳が、楽浪郡の太守（長官）の掾であった王光の墓であることが明らかにされた。

楽浪郡は、中国の前漢の武帝が、北朝鮮に国をたてていた衛氏を滅ぼして設置した郡である。その郡の役所は、大同江に沿う現在の平壌の対岸で唐土城とよんでいるところにあり、付近には、漢民族の古墳がいまも千数百基もちらばっている。王光の墓は、そのうちの一つであった。しかし、王光なる人物については、この墓の出土品以外には、なんら手がかりもないが、この墓の規模やこの墓から発見された副葬品からみて、かなりの権勢をもった人間であったと想像される。

これまでの、楽浪郡跡の古墳の調査でも「王平」「王宜」「王雲」の文字のある、塼とよぶ瓦や「五官掾王旰印」という印文の木印が発見されていた。さらに『魏志』倭人伝には、正始八年（二四七）に、帯方の太守王頎なる者が赴任したことを伝えている。楽浪郡に壮大な墳墓を築いた王氏が、楽浪郡の南方に新しく設けられた帯方郡の太守として赴任したもの、と考えられる。

王光の墓　楽浪古墓の一つである。棺内に残る「王光之印」などから，王光墓の名でよばれるようになった。木槨の中には二個の棺があり，王光と，推定30歳前後とみられる彼の妻の遺骸とが葬られていたという。日本に大陸の学問を伝えたという王仁の系譜をたどれば，朝鮮からさらに中国へとつながっていく。



王氏の耳杯　楽浪の王光墓から出土した漆の耳杯（じはい）。杯の両側に耳（把手）がついているので，あつものなどを食べるのに便利である。戦国から漢代にかけての中国・朝鮮では，銀や青銅の耳杯もあるが，漆器がもっとも高価であった。この耳杯の底部には「利王」の銘がある。「利王」とは，王氏に利益が多いようにという吉祥の言葉であろう。

こうしたことから、わが国に文運を最初にもたらした王仁も、じつはまったくの仮空の人物ではなくて、この王氏の子孫として実在したものと考えても、案外さしつかえないのではないか。楽浪の王氏が、いずれも平・宜・雲・光などめでたい文字の一字名である。その一人に『論語』の教えの眼目である仁の一字を名とする者があっても不自然ではない。

では、楽浪の太守の一族ともあろう者が、なぜ、百済から奉られる人間としてわが国におくられることになったのであろうか。これは、当時における東アジア諸民族の興隆と深い関係がある。

王氏南遷

漢の武帝が北朝鮮を征服し、楽浪郡など四郡をたてて、漢民族が移住してから、漢文化はとうとうとしてこの地方に流れ込み、周辺の原始民族に強い影響を与えた。わが国が石器時代から金属器時代にすすんだのも、その影響である。

朝鮮では、まず満州の東南部に住む高句麗族が最も早くおこり、西暦紀元ごろにはすでに国を建てていたと伝える。その後、二世紀ばかりの間にしだいに勢力をつよめ、しばしば漢民族と戦争をくりかえしていたが、やがて後漢の末、漢の乱れに乗じて南下し、楽浪郡をおびやかすにいたった。そのため楽浪の郡民は、大同江のほとりから南方にのがれて韓の地に流入する者が少なくなかった。そこで、二世紀の初めごろ、楽浪郡の南方、漢江の下流に一郡をたてて、半島における漢民族の勢力の再建をはかった。これを帯方郡という。その太守に、楽浪郡の属官であった王氏の頎が任命されたことは、前に述べた。これがいわば王氏の南遷である。明治四十四年、もとの帯方郡の郡治あとの古墳から「大康元年三月八日王氏造」と銘文のある塼が発見された。大康元年は、中国本土の西晋の年号で

あり、紀元二八〇年にあたる。王氏の南遷のあとをここにもみるのである。

三世紀に邪馬台国の女王卑弥呼の使いがやってきたのは、この帯方郡であり、王頎が太守として赴任したころであった。卑弥呼の使者は、王頎に向かって、女王が狗奴国の男王と不和になり、たがいに攻め合う状況を訴えた。太守は属官の塞曹掾史張政らを派遣して教えさとしたという。王氏は、帯方郡の南方はるか海をへだてて倭国があることを知ったのである。

王氏百済に仕える

楽浪郡をおびやかしていた高句麗は、ついに楽浪郡を自国の領土としてしまった。三一三年のことである。

帯方郡もまた、その南方から百済に攻められてまもなく、その領内にいれられてしまった。その時期はたしかではないが、楽浪郡が高句麗に合併されてほどないころのことであろう。楽浪郡が置かれてからここまで、およそ四百数十年であり、ちょうどその年月の長さからいえば、わが国の平安時代にあたる。この長い年月は、ここを統治する王朝こそ、本土の政治情勢の変化によって、漢・魏・晋とかわったが、この地がい

戦争と女

朝鮮における日本軍が、しだいに敗色を濃くしていたころである。河辺瓊岳は従う女ともども捕虜になった。朝鮮の将軍は言った。

「お前は命とこの女と、どちらが大事か」

「もちろん、命です」

女はつれ去られて、白昼、衆人の目の前で将軍におかされた。

同じとき捕虜となった調伊企儺を、朝鮮の将軍は裸にして尻を日本に向け、「日本の将兵よ、この尻をくらえ」と言えと脅迫した。しかし伊企儺は叫んだ。

「新羅王よ、わが尻をくらえ」

たちどころに斬り殺された彼にとりすがって、その子たちも死に、妻の大葉子は領巾を日本に向かって振りながら死んでいった。

日本の総大将、大伴狭手彦の船が九州をたつ時、残された妻は山上に立って、船へ領巾を振りつづけた。

狭手彦も朝鮮の美しい王女を捕えて日本に送ってきた。さっそくその美女と従女とを二人ながら妻としたのは、時の大臣蘇我稲目であった。

好太王の顕彰碑　高句麗の広開土王の功績をたたえた石碑で、碑文の中には「国境に満ち、城池を潰破し、奴客をもって民とたす」倭人を敗走させたことがみえる。いま鴨緑江岸にたつ高さ六メートル余りのこの石碑は、日本軍が朝鮮半島にまで侵攻した記録であり、また敗戦の記念碑でもある。好太王は広開土王の美称である。

つも漢民族の植民地であったことにかわりはなかった。郡の滅びた当時は、王氏にかわって張氏が楽浪・帯方の太守となって、高句麗の南下、百済の北上に対抗していたが、ついにこの地を放棄することになると、その民千余の家族を率いて、中国本土に近い燕に亡命したという。

だが、前漢の最盛時、楽浪郡の戸数は約六万戸、人口約四十万人を数えていたのである。亡命もせずに高句麗・百済の支配下にはいった漢人も少なくなかったはずである。太守の地位をとってかわられた王氏一族は、張氏とは別行動をとった可能性が多い。楽浪・帯方の遺民である王氏は、こうして百済に仕えることとなったと考えても不自然でない。

帯方郡を合わせた百済と、楽浪郡を領土に加えて南下しようとする高句麗とは、やがて相戦うこととなった。初めは百済が優勢で、いま高句麗の領となっているかつての楽浪郡の平壌を攻めて高句麗王を戦死させるほどであったが、やがて高句麗国好太王のために形勢は逆転した。百済は中国本土の南方に建国していた東晋に朝貢して、中国から「鎮東将軍、領楽浪大守」の称号をうけるとともに、国土の統一を仕上げて興隆の機運にあふれた倭国王に援兵を請うた。

こうして大和朝廷の半島経営が始まる。ときに四世紀は後半に入り、天皇は誉田天皇、すなわち応神天皇の時である。四〇四年には、百済をたすけた日本兵は、遠く帯方郡の地に侵入し、進んで平壌をおびやかし、好太王はみずから戦いを指揮してようやくこれを退けるありさまであった。

楽浪遺民の収奪　倭兵が帯方郡に侵入し、楽浪の地に戦いをまじえたことは、あたか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com